

# キャンディ

2007(平成19)年8月16日鑑賞(角川映画試写室)

★★★



監督・脚本=ニール・アームフィールド／原作・脚本=ルーク・デイヴィス『Candy』／出演=ヒース・レジャー／アビー・コーニッシュ／ジェフリー・ラッシュ／トニー・マーティン／ノニ・ハズルハースト (ワイズポリシー配給／2005年オーストラリア映画／108分)

……かわいいタイトルに似合わない、賛否両論を呼んだ愛の問題作は、オーストラリア人監督とオーストラリア人俳優によるオーストラリア映画！ キャンディとダン。2人はドラッグと共に2人だけの楽園に生きていたが、それは一体いつまで続くの……？ また、天国から地上へ、さらに地獄へと進んでいく彼らには、一体どんな結末が……？ ドラッグと愛をテーマとしたこの映画は、『シネマから学ぶ生きた法律』のネタとしても最適。そんな映画に、あなたも是非注目を！

## オーストラリア人監督とオーストラリア人俳優によるオーストラリア映画！

日本人の私たちには、アメリカ映画とフランス映画の区別はついても、アメリカ映画とオーストラリア映画の区別はつきにくい。なぜなら、多少の訛りはあるにせよ、しゃべる言葉は同じ英語だし、アメリカ人とオーストラリア人は肌の色も顔つきも同じ(?)だから……。

ハリウッドで大成功しているオーストラリア出身の女優がニコール・キッドマンであり、それに続くナオミ・ワッツであることはよく知られているが、実はこの映画のヒロインであるキャンディ役を演じたアビー・コーニッシュは、その2人に続くオーストラリアの新星として話題を呼んでいる女優。

他方、繊細な神経がその表情の隅々にまで現れている、詩人志望の青年ダンを演ずるヒース・レジャーは、『ブロークバック・マウンテン』(05年)でアカデミー賞主演男優賞にノミネートされた若手だが、これまたオーストラリア生まれ。そして、何よりもこの映画を監督し、原作のルーク・デイヴィスと共に共同で脚本を書いたニー

ル・アームフィールドは、オーストラリア演劇界の著名な演出家として知られ、また既にこれまで2本の映画を監督している人物。プレスシートにある佐和田敬司氏の「ニール・アームフィールド監督とオーストラリア演劇～映画『キャンディ』を楽しむために」には、そのあたりの事情が詳しく解説されているので、興味のある方は是非参照してもらいたい。

この映画は、そんなオーストラリア人監督とオーストラリア人俳優によるオーストラリア映画。したがって、その舞台もすべてオーストラリアの地であり、シドニーのインナーウェスト、ワラシア郊外の東部、ニューサウス・ウェールズなどで撮影されたとのこと。まずは、それくらいのお勉強を前提として……。

### 『シネマから学ぶ生きた法律』の格好の素材に……

『SHOW - HEY シネマルーム』は2007年10月にパート13と14が同時刊行されるが、私はそれとは別のシリーズとして前々から『シネマから学ぶ生きた法律』シリーズを企画している。映画から学ぶ法律上のテーマや論点はたくさんあるが、この映画はまさに若者とドラッグをテーマとし、ドラッグの恐さをアピールするためのもの……？

そう決めつけてしまうと、きっとニール・アームフィールド監督は怒るに違いない。なぜなら、彼はあくまでこの映画を芸術作品としてつくったのであって、薬物撲滅キャンペーンのための啓蒙作品としてつくったのではないのだから……。もちろん、私だってそれくらいのことはわかっているが、この映画では薬物を介した(?)ダンとキャンディの愛の姿も美しいが、薬物に溺れそこから脱出できなくなってしまったダンとキャンディの地獄のような姿も強烈だから、きっと薬物撲滅キャンペーンという切り口からも紹介できるはず……。

### ジャンキーとは……？ キャンディとは……？

事前にチラシを読んだ時、この映画は「2006年のベルリン国際映画祭で賛否両論の渦に巻き込んだ愛の問題作」と書かれてあったが、同時に「彼らは誰も立ち入ることの出来ない、ふたりだけの愛の楽園に生きていた」とも書いてあった。また『キャンディ』というかわいいタイトルからも、私はこれほどハードな映画とは思っていなかった。

何がハードなのか……？ それは、ダンとキャンディの2人はジャンキー

(junkie)という言葉で表現される人間だということだ。このジャンキーとは麻薬常用品者という意味だから、いくら天下の美男美女が主役として登場し、幸せな2人だけの愛の楽園の中に生きていたとしても、それが続くはずはないのは当然。ちなみに、ニール・アームフィールド監督はプレスシートにおいて、「ルークと私は中毒性とは何なのか、という問いをさらに掘り下げようと試みた。映画の中心にあるのは、あなたも私もジャンキーであるという提案である」と、何とも過激なコメントを……。

さらに、私は『キャンディ』というかわいいタイトルとも紹介した。たしかに、この映画でアビー・コーニッシュが演ずる画家の卵であるキャンディは名前も実物もかわいく魅力的な女性。しかし、ネット情報によれば、実はコカインの末端の密売における呼び名として、コーク (coke)、トゥート (toot)、ブロウ (blow)、キャンディ (candy)、リーフ (leaf)、ノウズ・キャンディ (nose candy) などがあるとのこと。つまり、キャンディはコカインの俗称でもあるわけだ。そんなこと、あなたは知ってた……？

## 名俳優ってホントに何でもできるもの……

20歳を過ぎた若者たちが自分で自分の生き方を選ぶのは仕方ないが、その若者たちに対して大人がどう絡んでいくのか、それがいつの時代でも、またどの国でも問われているはず。その点、ダンの方は両親との接点は全くなく、既に家族から見放されている様子。しかしキャンディの方は、父親のワイアット氏 (トニー・マーティン) と母親のワイアット夫人 (ノニ・ハズルハースト) の下で、目の中に入れても痛くないような状況下でかわいがられながら育ってきた感じ。しかし、キャンディにとってはそれが逆に重荷であり、とりわけ母親からの干渉がいかに大きな重圧となっていたかが映画の中で明らかにされていくから、それに注目を。

他方、両親とは別に、どんな若者でも影響を受ける先輩や恩師が1人や2人はいるもの。それがこの映画では、大学の薬学の教授のキャスパー (ジェフリー・ラッシュ) だ。彼は決して、ダンやキャンディにとってマイナスとなる人間ではない。逆に、彼らに対して金銭的な援助もしてやっている立派な応援者なのだが、実はその薬物に関する応援が、ダンとキャンディに対してはもちろん、自分自身も大変な破滅の道を招くことに……。

自らもジャンキーであり、豊富な薬物の知識を生かして自分の手でドラッグをつく

り出すこともできるという珍しいキャラのキャスパーを演ずるのは、何と近時『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズでキャプテン・バルボッサ役を演じて観客を大いに湧かせているジェフリー・ラッシュ。オーストラリア出身の彼は、1996年にあの『シャイン』で各映画賞を総ナメにした名俳優だ。

そんなジェフリー・ラッシュが実に自然に薬学の教授キャスパー役を演じているのを見ると、ホントに名俳優って何でもできるものだと痛感……。

## 売春で食ってても、2人は幸せ……？

この映画は『天国』『地上』『地獄』という3部構成となっているから、2人が幸福の絶頂から次第に堕ちていくサマがうまく段階的に表現されている。第1部『天国』(Heaven)を象徴するのが、キャンディが描いた『極上の喜びに満ちた午後』というタイトルの絵。これは、ホントに飾っているだけで、幸せが周囲に広がっていくような作品だから、その複製でもあれば是非購入したいところ……。

結婚式直後にダンの様子がおかしいことに気づき、ひょっとして彼はドラッグ中毒では、と覚ったキャンディの両親は、娘の将来に不安がいっぱいだが、当の本人たちはまさに幸せの絶頂。もっとも、ロクな稼ぎがないうえ、ドラッグの購入費は結構かさむだろうから、2人の財布はきっと火の車……。しかし、若い時は何とでもなるもので、カネがなければキャンディが売春して稼げばいいやというのが2人が導き出した合理的な結論。しかし、それってやっぱりおかしいのでは……？ 妻が売春をしてカネを稼ぐ状態でも、ホントに2人は幸せの絶頂に……？

## 詩人の卵は、詐欺師の才能も……？

第2部『地上』(Earth)では、多少は2人の口論も出現することに……。ダンも男でも売春ができるなら喜んでやるが、ホモ相手の行為だけは勘弁してくれという理屈。また、未払い家賃の督促にやってきた不動産屋に対する2人の理屈は、ジャンキーと娼婦の結婚生活だから1000ドルもの未払い家賃は支払えるはずがないというもの。しかし、こんな理屈がどこかへんなことは明らか。

こんな2人の姿を見ていると、ジャンキーの恐さ以上に、社会適合性のなさが大問題。それを強く心配しているのが厳格な母親だが、私の立場もそれに近いもの。日本でもこの2人に似たようなその日暮らし的な若者が多くなっているのは大問題、と私

は憂えているところ……。

もともと、社会適合性がないからといってダンを決してバカではなく、詩人を目指しているくらいだから、どちらかというとなんかいい方。そんなダンの才能が見事に生かされたのは、ある窃盗事件で見せるカードの現金化の仕方。せっかく車の中から盗んだ財布には現金がなく、入っていたのは1枚のカードだけ。さて、ダンはそれをどのようにして現金に……？ その天才的な詐欺師ぶりは、8月12日に観た『オーシャンズ13』（07年）の天才詐欺師マット・デイモン扮するライナスを彷彿させるものだった……。

## 妊娠はドラッグをやめる契機に……？

この映画で面白いのは、キャンディが妊娠したという報告を受けたダンの反応とキャンディの両親の反応。意外だったのはダンで、「墮ろす？」と質問するキャンディに対して、「何を言ってるんだ。産んでもらいたいんだ」と答えたこと。これが口先だけのものでないことは、キャンディの妊娠を契機としてダンがドラッグから足を洗おうと本気で決意したことからも明らか……。また両親の方は、父親はただバカ喜びだが、母親は喜び半分、不安半分というところ。だって、こんな中途半端な娘とジャンキーの夫がホントに子供を生み育てることができるの、と考えたのは当然だから。

この映画が『シネマから学ぶ生きた法律』のネタとして最適なのは、2人が本気でドラッグを断ち切ろうと頑張るシーン。食料品などをたんまりと買い込み、テレビだけを頼りにベッドの上で頑張る2人だったが、1日目、2日目、3日目と進むにつれて、その禁断症状はすさまじいものに……。そんな状態の中、果たして妊娠中のキャンディの身体は耐えることができるのだろうか……？

## 地獄の様子は、あなた自身の目で……

禁断症状と闘う中で倒れ、出血したキャンディは運び込まれた病院の中で、生きる可能性のない赤ん坊を取り出すことに……。そんな失意の中、その後のダンとキャンディの生活は予想どおり元の木阿弥。つまり、ドラッグを手に入れるため、キャンディは再び売春婦として街に立つという地獄のような生活に逆戻りというわけだ。

そんな2人だから、空気のいい田舎に住み心機一転しようと言われても、あまり実現可能性はないはず。現に移り住んだ田舎のコテージはボロボロで、わざわざ遠くか

ら両親を招いても、食事をつくることすらできず、母親とキャンディは激しい口論を始める始末。すべてが最悪で、ホントに地獄のような生活が続いただけだった。そんな中、ダンとキャンディの離別はすぐそこに……？

この映画に関して私はかなり詳しく天国と地上の様子を紹介し、また地獄の入口も紹介してきたはず。したがって、ホントの地獄の様子は私の評論なしで、あなた自身の目で確認してもらいたいもの。もっとも、ニール・アームフィールド監督が描く地獄のサマは、かなり叙情的で美しいものかもしれないが……？

### さて、どんなエンディングに……？

天国から始まり、地上を経て、地獄へ墮ち、そして映画のラストはドボンのまま……。それでは映画のアピール性やメッセージ性は見えてこないことに……？　そこでさて、オーストラリアの舞台で鳴らしたニール・アームフィールド監督は、この映画にどんなエンディングを用意しているのだろうか……？

少しだけそのヒントを言えば、あまりの肉体的・精神的苦痛に耐えられなかったキャンディは、遂に精神のバランスを崩し、「それ用」の施設に入ったこと。しかし、数年後それが回復して施設を出ることになったこと。そして、ダンとキャンディは再会することになること。私がこの評論で言えるヒントは最大限そこまでだ。

キャンディがコテージ内の壁という壁に口紅やマニキュアを使って書き残した美しい物語を参考にしながら、このダンとキャンディに訪れる何ともやるせないエンディングを、じっくりと味わってもらいたいものだ。

2007(平成19)年8月17日記